菊水小学校　学校だより　　第８号

『みんなの笑顔のために』

Ｒ５．７．１８

文責　井上雄治

平和について考える

今年、終戦から７８年になります。夏休みには、テレビでも「平和」について考える番組がよく放映されます。過去の戦争によって、多くの人々の命が奪われました。軍人ばかりでなく、子どもやお年寄りなど民間人も数多く殺されたのです。人としての幸福や生きる権利を無理矢理奪われました。まさしく**「戦争以上の人権侵害はない」**のです。過去の過ちを二度と繰り返さぬために、本校でも「平和についての学び」を進めています。６年生は、長崎への修学旅行を通して「平和学習」に取り組みます。

しかし、終戦から７８年経過した今でも、世界に目を向けると戦争により尊い命が奪われている現実があります。夏休みを「平和」について考える機会としてほしいと考えています。

戦争の傷跡

今から２３年前の戦後５０年目にあたる年、当時勤めていた学校で地域の方から戦争体験談を募集したことがあります。一通の手紙が寄せられました。その手紙の中の**「中国残留孤児の方々は幸せなほうだ。・・・」**という一文に私は衝撃を受けました。戦争の結果、祖国に帰れず中国に取り残された不幸な方々であるというそれまでの認識がくつがえされのです。その方は、これまで家族にも話したことがないという体験談を次のように手紙に綴ってくださっていました。

「ソ連軍の侵攻により、線路伝いに逃げる途中、力尽きて母親の名前を呼びながら、倒れる者もいた。そのような人を助けたいが、自分が生きるためには見捨てていくしかなかった。そんな厳しい状況の中、生き残ることができたのが中国残留孤児の方々である。・・・・・」

※中国残留孤児とは、１９４５年（昭和２０）８月、ソ連の対日参戦とそれに続く日本の敗戦で混乱を極めた中国東北部（旧満州）において、家族にはぐれたり置き去りにされたりして中国人に育てられてきた日本人の子どものことをいい、その数は、８，０００人とも１万人を超えるとも言われています。

ある養父母の話です。（ＮＨＫスペシャル「大地の子を育てて」より）

一人の中国人の女性が路地で着物の帯にくるまれた生れたばかりの赤ん坊を見つけた。女性はその赤ん坊を連れ帰り、夫婦で話し合い、自分たちの子どもとして育てることを決めた。しかしその３日後、夫は海岸で日本兵に殺されたのである。親戚や友人は皆、「そんな日本人の子どもを育てるのはやめろ。」と言ったが、その女性は「子どもには罪はない。」と、その子を自分の子どもとして育てたのである。

ソ連軍の侵入と同時に日本軍に遺棄され、一切の保護を失った人々は、虐殺・暴行・飢餓・病気の地獄をさまよわなければならなかったのです。そのような状況の中で、幼子を抱えた母親が想像を絶する悲惨さのなかで、生きるために自らの子を手放さざるを得なかった例は数限りなくあったと考えられています。残留孤児とは、こうした状況の中で幸いに生き残り、善意の中国人の手で育てられてきた人たちなのです。

実は私の義理の母（妻の母）も、運良く日本に帰ることができた一人です。当時幼かった義理の母を、周囲の人は（足手まといになるから）『置いていけ。』と言ったそうです。しかし、（義理の母の）母親は手放すことなく日本に連れ帰ってくれました。もし、義理の母がその時、日本に帰ってくることができなかったら、私の妻は存在せず、当然現在の私の３人の子どもも存在しなかったはずなのです。

これまでに、日本に帰国された残留孤児の方々もたくさんいらっしゃいます。しかし、そこに至るまでには、多くの課題があったそうです。自分の祖国、日本に帰りたいという気持ちと、これまで自分を育ててくれた養父母を中国に残して行けるのかという葛藤の中で悩まれている場面がテレビでも放送されていました。戦後７８年経過した今でも、戦争の傷跡は生々しく残っているのです。

これまでに修学旅行で幾度か沖縄を訪問し、平和記念資料館に足を運んだことがあります。展示室の出口の壁にかかれていた「むすびのことば」がとても印象に残っています。

＜沖縄県平和祈念資料館　展示　むすびのことば＞

沖縄戦の実相にふれるたびに
戦争というものは
これほど残忍で　これほど汚辱にまみれたものはないと思うのです

この　なまなましい体験の前では
いかなる人でも
戦争を肯定し美化することは　できないはずです

戦争をおこすのは　たしかに　人間です
しかし　それ以上に

戦争を許さない努力のできるのも
私たち　人間　ではないでしょうか

戦後このかた　私たちは
あらゆる戦争を憎み
平和な島を建設せねば　と思いつづけてきました

これが
あまりにもおおきすぎた代償を払って得た
ゆずることのできない
私たちの信条なのです